

五十肩と FDG 集積に関する検討

¹岩井整形外科内科病院 メディチェック画像診断センター 放射線科

²同 整形外科

小松 孝志¹, 竹政 和彦¹, 稲波 弘彦²

【目的】 五十肩は、疼痛と可動域制限を主体とし、中年以降に好発する明確な器質的変化を認めない疾患である。FDG-PET は関節炎においても鋭敏に炎症部位を捉える事が知られており、今回 FDG-PET 検診でよく見られる肩関節への FDG 集積と五十肩との関連を検討した。

【方法】 2012 年 4 月から 2014 年 4 月までの PET 検診者 435 名の内、問診時において肩関節痛（運動時に僅かな痛み～中等程度の耐えられる痛み）を自覚している受診者 18 名（47 歳から 74 歳）、無症状 FDG 集積 28 名（29 歳から 78 歳）について日本整形外科学会肩関節疾患治療成績判定基準の I 及び III のスコアと FDG 集積を検討した。肩関節疾患治療成績判定基準 I 疼痛は 0～30 点、III 可動域（自動運動）は拳上、外旋、内旋の合計 0～30 点に分類し、SUVmax と比較した。

【結果・考察】 疼痛群 SUVmax と肩関節疾患治療成績判定基準 I、III、I + III の r は、各々 0.764、0.494、0.697 疼痛スコアと可動域スコア $r = 0.703$ でいずれも相関が認められた。疼痛群の SUVmax は平均 2.88 ± 0.79 無症状群は平均 1.88 ± 0.20 ($p < 0.001$) で、疼痛群は肝以上、無症状群は縦隔以上、肝以下の SUVmax であった。

五十肩は MRI 等の画像診断では明確な変化を捉えられない場合が多いが、FDG-PET では微細な炎症を反映することができ、五十肩の画像診断の一助となることが示唆される。